小川さやか　論文内容の要旨

主　　論　　文

Type A Behavior Pattern and Obesity in Japanese Workers: A Cross-Sectional Study

日本人労働者におけるタイプ A 行動パターンと肥満：横断的研究

小川さやか，田山淳，西郷達雄，武岡敦之，林田雅希，山崎浩則，清水悠路，調 漸

ACTA MEDICA NAGASAKIENSIA・61 巻 3 号　in press

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科医療科学専攻
（主任指導教員：調 漸 教授）

緒　　言

肥満は様々な疾患の危険因子であり，近年社会的に是正しなければならない問題になっている。肥満は糖尿病，脂質異常症，高血圧などの生活習慣病の主要な原因であり，心疾患や脳卒中のリスクを高める。食行動異常やパーソナリティを含む心理社会的要因は，肥満の原因の一つであると考えられている。心理的ストレスを溜めやすいパーソナリティは肥満を増長する。心理的ストレスを溜めやすいパーソナリティとしては，古くから心血管疾患と関連のあるタイプ A 行動パターン（Type A Behavior Pattern：TABP）が知られている。TABP とは，敵意性，怒りやすさ，時間切迫感，熱中性，徹底性，緊張，几帳面さ等に特徴づけられる人の心理・行動特性である。TABP 者はそうでない人に比べ，心理的ストレスが高いことがわかっている。先行研究では，TABP がメタボリックシンドロームのリスクファクターであることが報告されている。TABP を構成する敵意性や怒りやすさが飲酒や喫煙のような生活習慣を増やし，これらの生活習慣がメタボリックシンドロームのリスクファクターになる。ハワイ在住の日本人を対象にした先行研究では，男性において TABP 者はそうでない人に比べて，肥満者の割合が高いことが報告されている。しかしながら，わが国では，TABP と肥満に関して詳細な検討は行われていない。そこで，本研究では，日本人労働者の肥満と TABP との関連を検討することを目的とした。日本人労働者において，TABP は肥満のリスクファクターであるという仮説を検証した。

対象と方法

対象は 2009 年の職員定期健康診断を受け，本研究に同意した長崎大学職員 3,099 を研究の潜在的適格者とした。このうちデータが欠落している 140 人を除外し，2,959 人（男性 1,437 人，女性 1,522 人）を解析対象者とした。なお，本研究は長崎大学大学院医歯薬学総合研究科の倫理委員会の承認を受けた。肥満の定義は，日本肥満学会の定義を用いて Body Mass Index (BMI) ≥ 25 kg/m^2 とした。定期健康診断会場にて，体

重，身長を測定した。TABP の測定として，A 型行動票（前田，1985）を用いた。対象者には質問紙にて，年齢，喫煙習慣，飲酒習慣，運動習慣，職業，食行動（早食い），を尋ねた。統計解析は肥満群と非肥満群で χ^2 検定および t 検定を行った。肥満を従属変数として，男女別で多重ロジスティクス回帰分析を行った。多重ロジスティクス回帰分析では，年齢，喫煙習慣，飲酒習慣，運動習慣，職業，食行動（早食い）を共変量とした。

結　　果

肥満群は非肥満群に比べて, BMI, TABP 得点, 年齢が有意に高かった（$p < 0.0001$）。また，肥満群は非肥満群に比べて，男性の割合，喫煙習慣者の割合，早食いの割合が有意に高かった（$p < 0.0001$）。年齢，喫煙習慣，飲酒習慣，運動習慣，職業，食行動（早食い）を調整した多重ロジスティクス回帰分析を行った結果，男性において，TABP の肥満に対するオッズ比は 1.55（95%信頼区間：1.13-2.13）だった。年齢，運動不足，食行動の早食いは，男性の肥満のリスクファクターであった。女性では TABP の肥満に対するオッズ比は 1.27（95%信頼区間：0.81-2.02）であり，有意ではなかった。女性では，年齢および食行動の早食いが肥満のリスクファクターであった。

考　　察

日本人労働者の男性において，共変量を調整しても TABP は肥満のリスクファクターであった。しかしながら, 女性では TABP は肥満のリスクファクターではなかった。したがって，TABP が肥満のリスクファクターであるという仮説は，部分的に支持された。その理由としては, 男性において TABP 者は, 早食いであることが考えられる。先行研究では早食いと肥満は関連していると報告されている。TABP 者は，パーソナリティの特性上せっかちであり，食事においても早食いの傾向があると考えられる。早食いでは満腹感がえられにくいため，食事の過剰摂取につながりやすいと考えられる。TABP 者男性は，早食いにより食事の過剰摂取をすることで体重が増加する可能性が示唆される。

本研究の限界点として，研究デザインが横断研究であったこと，一つの職場のみの調査であること, TABP の測定に自己記入式を利用していることがあげられる。また，肥満との関連が指摘されている内分泌疾患，代謝疾患，精神疾患，ステロイド内服の有無を本研究では調査していない点が限界点としてあげられる。本研究の結果から，日本人労働者の男性において，TABP は肥満のリスクファクターであることが明らかとなった。今後は，これらの点を考慮した研究方法を実行することおよび TABP を考慮した減量プログラムの作成を検討している。